『あらわれるげきじょう』

大原志保子 わたし
板垣奈那 ニンプ

作 樋口ミユ

「わたし」は荷物を持ってやってくる。
マスクをして。

準備を始める。

必要な小道具などをここへ、
衣装をあちらへ、
明かりの位置を調整して置き、
コードの処理をする。

ビビッと、

白いビニールテープを引っ張って、

床に貼る。

白いテープで四角を区切る。

どうやらそれが舞台らしい。

うん、ヨシ。

と、うなずいて、

舞台に椅子を一つおき、

いくつかの椅子を、

対面するあちら側に置いた。

うん、ヨシ。

と、またうなずいた。

確認のために、照明をスイッチオンにすると、

おお、なんとなく素敵空間になってまた、

うん、ヨシ。

うなずいたあと、

観客をじっと見た。

そして、

わたし 話をしてもいいですか？

ゆっくりとマスクを取った。

そしてこちら側の椅子に座る。

再び観客を見る。

わたし 作家じゃないから、

わたし わたし、

わたし ホンなんか書けないし、書きたいとも思わないけど、

わたし 自分が見て、自分が体験したことは、語れる。

わたし 言葉を、

わたし あの子が、

わたし 彼女がね、わたしに言った言葉、

わたし 受け取ったからわたし、

わたし これ誰かに渡さなきゃ、

わたし って、

わたし 思っで。

わたし 語るならそれならわたし、この声と体を使えるなって、

わたし 役者だから、

わたし だから。

わたし あなたが受け取ってくれたらまた別の誰かに渡して、

わたし 渡して、

わたし 渡して。

わたし いつかの未来、どこかの場所まで、渡していけるなら、

わたし 時間と空間を超えて。

わたし それこそが、

わたし わたしの演劇なんだと思う。

ニンプ あもう……

びくりどきり。

声がして、

「わたし」振り返る。

わたし あ……

旅人の姿。

しかしその腹ははちきれんばかりに膨らんで。

わたし ああああああああああ！

「わたし」椅子から飛び上がる。

わたし えっと、すみません、今日はまだその仕込みで、あ、準備中で、あの、
本番は明日の朝8時から1回公演のみとなっ……

言いかけるが、

わたし いや……！！

ニンプ ……いや？

わたし いや、どうせ誰か観にくるわけじゃないだろうしもう、だから、イマ、
あなたがいてくれるイマ、開演しますイマ、もうイマ、はいイマ、イマステ
開演しますからイマステイマ！

ニンプ あ、

わたし どこでこの公演のチラシご覧になりましたか、「空き家で演劇公演やつ
てます」のチラシ、あのわたし一軒一軒、あ、

「わたし」ごちゃごちゃのカバンの中から引っ張り出し、

ニンプ あ、

わたし あ、チラシこれで、ここらへんの家にポスティングして、いやでももうみんな移動してほんと空き家ばっかだけど望み託すみたいな、もしかしてこれ見て、

ニンプ 見てません。

わたし あ、

ニンプ 雨。

わたし あめ？

耳を澄ますと雨の音。

ニンプ 朝早くにすみません、雨宿りと思って入っちゃっただけで、その、わたし あ……

ニンプ すみません。

わたし あー……観劇じゃあなくて……

ニンプ ごめんなさい。

わたし ああ……

ニンプ すみません、お邪魔だから隣の空き家で雨宿りしま、

わたし いやもうこれせつかくの運命的なアレだから！

ニンプ アレ……？

わたし いま、人と、誰かと会えるなんてアレがほらアレのアレは、

ニンプ レア？

わたし そう！

ニンプ、じっと「わたし」を見た。

ニンプ ……わたしも。もしかして、人がいるんじゃないかって、その、心配がしたから……わざわざ声かけたんだと思います。

「わたし」、うれしくてニカッと笑った。

わたし こちら、こちらへどうぞ。

あちら側の席にニンプを案内して、

わたし すぐ、すぐに始まりますので。

わたし あ。

「わたし」、ニンプの体を気遣う。

どこからか座布団か、クッション、または毛布を持ってきて、

わたし これ、

ニンプ、ありがとうと頭をさげた。

わたし すぐ、すぐに、はい。

ぺこりと頭を下げると、

舞台上の明かりを一度落とす。

手元の音響機材から、音楽。

どんな音楽だろうか。

聞こえてくる。

ゆっくりと明かり、再び灯る。

その中央に登場した「わたし」は、セリフを言うかと思いきや、

ニンプではなく、

ふっと観客に視線を投げた。

わたし のちに彼女は、この時のわたしの一人芝居を、

ニンプもさっと観客に視線を投げかけ、

冷ややかな声で。

ニンプ 涙が出るほどつまらなかった。

わたし と、言い放ったほどの演目。そもそも以前の座長が作ったやつでわたしも薄々つまらないんじゃないかなあなんてふんわり思っていたけど疑っちゃあ出来ないから、面白くないのは役者のわたしのせいだ、わたしが悪い、そうだお前が悪いと心ない演出家は言っちゃいますから、ああ、もっと精進しなきゃ、だけどセリフを言いながらちらりと客席に眼をやると、

ニンプ ふああとあくび。

わたし いったい、

ニンプ、またあくび。

わたし にかいさんかい、

ニンプ、ここから怒涛のあくび。

わたし よんかいごかいろくななはちううううううううんぬああああああああああ、あつ！ 久しぶりの観客を目の前に、

「わたし」まるで歌舞伎のようにコブシをまわす。

わたし あつ、もう嘘はあつけなくなりましたああ……！

「わたし」、さっと隠し台本を取り出し、

わたし こんな台本、ちええええええええええいっ！

台本を床に叩きつける。

ニンプ つつつ！？

「わたし」ふうふうと息を吐き出し興奮している。

ニンプ ……え？

わたし すいません！

ニンプ え……え？ あ、こういうお芝居……

わたし 違います！

ニンプ ちが、え、え？

わたし やめます！ もう自分でこりやダメだなんてうっちゃって！

ニンプ え、

わたし お客様にあくびを28回もさせるのはもういかんだろうって！

ニンプ 数えていたん、

わたし 数えていました！

ニンプ すみませ、

わたし 謝らないでくださいこちらこそすみません！

ニンプ でも、その、あたし、ずっと歩いてきたから寝不足だけで、

わたし じゃあ面白かったですか？

ニンプ あ……………

わたし 面白かつ、はいその顔、正直者です！ 金の斧も銀の斧もどちらも差し

上げましょう。

ニンプ いまのこれはお芝居？

わたし ただのアドリブです。もう、こんなの、

「わたし」台本を見た。

わたし すいません。つまらないもの観せちゃって。一人芝居の演目、実はこれしかなくて、だから仕方なく、あ、だめ、仕方がないもの見せちゃって、すみません、お客様、久しぶりで、たったひとりでも、そこに座ってくれるの本当に久しぶりで、したら色んなことが分かっちゃって、イマ、急に、やけに鮮やかに、やけにリアルに分かっちゃって、ずっと見ないふりしてたなあって、けどもうできません……だってこれ、つまらないです。本もわたしも何もかも。ああ、やっと言えた長かったなあ……わたしが新しいもん書けたらいいんだけど、そんな無理で、それにもう、他に、誰も……

わたし じゃなくて……

「わたし」自分がひとりなのを実感して、
ちよつと落ち込むが、すぐに明るい声を作った。

わたし すいません、お金、お返しますね。

ニンプ いえまだ払ってませんから。

わたし でしたか……

ニンプ はい……

わたし はい……

ニンプ ……お話が……面白かったかどうかは、その、わたし、お芝居って、
たくさん観たことなくてごめんなさい、うまく言えないですけど、

わたし え、面白いですか。ノミの話ですよ。下品極まりないですよ。2匹の
ノミが飛行機に乗る時にどこに座るか話していると、「そういう時はキャビン
アテンダントのおねえちゃんの下着に潜り込むんだよ。湿っていてあつたか
くて最高だぜ、そんでよく眠れる」それを聞いたもう1匹のノミが、じゃあ
オイラもやってみようって綺麗なキャビンアテンダントのおねえちゃんの下
着に潜り込んで、「やあこりやイカすぜたしかに寝心地最高だ」ってスヤスヤ
眠って、なのにごぶるるん、なぜかハーレーダビットソンをかつ飛ばす男
の口ヒゲの中で目が冷めて風に飛ばされそうで凍えそうだけべいべー……

ニンプ そういうオチ……

わたし しかも昔の海外ドラマのネタを丸パクリですよ面白いですかこれ。

ニンプ あ、だからお話がどうか、そういうのは、

わたし 中2男子の10分間休みの下ネタトークじゃないですか面白いですか

これ、え、面白いですかこれ、え、面白、

ニンプ 面白くないです。

わたし ありがとうございます、ああ、スッキリした。

ニンプ でも、面白かったんです。

わたし ……は？

ニンプ 久しぶりに人と会ったから、

わたし あ……

ニンプ、自分が歩いてきた町を思い出す。

ニンプ どの町を歩いててもひっそりして。
わたし ……はい。

ニンプ でも気配は感じたりして、

わたし ああ、それすごくわかります。

ニンプ 残っている人もまだ、きっとそこにここにどこかに居て、
わたし はい。

ニンプ だけでも多くは、移動完了した目印の白い張り紙ばかりが建物に貼られてハタハタと風に吹かれ揺れて、

「わたし」も、自分が目にした風景を思い出す。

ニンプ 無人の道路。

ニンプ 無人の住宅街。

ニンプ 無人の映画館。

ニンプ 無人の喫茶店。

ニンプ 無人の銀行。

ニンプ 無人の駅。

ニンプ 無人の、

ニンプ たった1年で、

ニンプ こんなにも、

ニンプ だから久しぶりで、

ニンプ 目の前に、

ニンプ 自分以外の人間がいて動いて喋って、それだけでもう本当に面白いんだなって、あっ……！

ニンプ、腹を抑えた。

わたし え……！？うそ、うそ、うそ、うそ、まじでちよつちよ、ちよつ……！

が、

ニンプ、お腹を撫でながら。

うふふ、笑った。

どうやら悪いことじゃないみたい。

ニンプ 「僕だっってここにいるのに……」って、主張した？

うふふ。

ほっとして。

「わたし」も思わずうふふ。

少し、緩んだ。

わたし あの、

ニンプ はい？

わたし その、トランク、

ニンプ ああ、はい。

わたし ……移動、されるんですね。

ニンプ え、

わたし 新しい星に。

ニンプ あ、

わたし 一昨日くらいから3時間ごとに船が飛びっぱなしで、

ニンプ ああ、はい。

わたし この上あたりもゴーっと飛んで行くから、

ニンプ はい。
わたし 3時間ごと、夜中もずっとらしいです。
ニンプ そんなにもまだ、残っている人たちがいたんですね。
わたし ですね。

「わたし」、ニンプのトランクを見ながら、

わたし 行列らしいです。

ニンプ ああ……

わたし でもきつと大丈夫。明日の朝8時の最終便までにはきつと、並んでい
る人たちはみんなきつと船に乗れますよ、大丈夫。

ニンプ あの、

わたし お気をつけて、

ニンプ 違います。

わたし え。

ニンプ 船には乗りません。

わたし ……え、

ニンプ 最終の船にも、船には、乗りません。

わたし え？ でも荷物、

ニンプ 新しい星へは行きません。

わたし ……………は……

ニンプ お話できて、良かった、良かったです。ありがとう。あ、

わたし え……

ニンプ 止みました、雨。晴れてきた……良かった。

ニンプ、トランク持った。

ニンプ では急ぎますので。

ニンプ、ゆっくりと「わたし」にお辞儀をした。

わたし ちよ、ちよ、待つ、待って待って、

「わたし」思わずトランクをつかんだ。

ニンプ つ……！

わたし え、最終って、本当の本当に最終なんですよ、分かっています？ 乗らないと、明日朝8時までに乗らないともう本当に完全にここに置き去りで、えっと、突っ込んじゃって申し訳ないんだけどあのその旦那とかご家族とか、

ニンプ、きりつとした目で「わたし」を見た。

わたし あうつつ、ほううつつ、すみません、他人がとやかくすみません、色々事情が、あ、事情って掛け合わさってすごいことになるそれ自乗みたいなすみません意味不明で、あのその……あ、またねてえぶるーとかじゃ、

ニンプ じゃないです。

わたし すいませんごめんなさい事情なんつつつにも分かんないけど、ヤケになつちやダメです。

ニンプ あなたにはそう見えるだけ。

わたし え、

ニンプ あたし、まともです。

わたし あ、

ニンプ まともじゃない世界の真ん中で、あたしは真っ当に、真っ向から、自分の考えで選んでここまで歩いてきて、これからも歩いていきます。

ぶるり。

「わたし」なにか言葉にしたいけれど、

うまくできず。

ニンプ ヤケになってるのは、あなたのほう。あたしにはそう見えます。

わたし ……え、

ニンプ 明日の朝8時からお芝居なんて、最終便の船の出発時間と一緒にわざ

ピンポンパンポン。

チャイムが鳴った。

マイクから音声、聞こえる。

「国民の皆さん、地域からのお知らせです」

「本日午前9時より、緊急集団移転を発令します」

「繰り返します。本日午前9時より、緊急集団移転を発令します。」

声が聞こえる。

人間たちの声。

マイクから。

「もう船の予約した？」

「全然予約取れないからあれシステム不全だよ」

「俺は行かないね、どうせこの年だし」

「絶対やめたほうがいい」

「新しい場所がどんな所か分からないのに」

「いや行ったほうがいい」

「この星、実はもうとつくに死んでるらしい」

「そんなフェイクニュースを世界中が信じるなんて」

「いやこつちが真実なんだって」

「え、お前移動する？」

「新しい星もかなりヤバいらしい」

「ヤバいってどつちの意味？」

「アタシは行くよ、生き延びたいからさ」

「国が移動っていったんだからそりゃ大丈夫だろう」

「大丈夫って言われて大丈夫だったことある？」

「もう世界中が機能付然起こしてるもんだから」

「濁して」
「ごまかして」
「黙ってる」
「だからヤバいって」
「行きたくない人には強制しないで欲しい」
「行きたいって言う人を責めないで欲しい」
「で、結局どっちの情報が陰謀論？」
「どっち？」
「どっち」
「どっちが本当」
「なにが」
「なにが」
「なにが正しい」
「お前どうする？ 移動する？ 残る？」
「1回目の集団移転は45パーセントになりました」
「どこからの情報？」
「国防省のホームページ」
「自治体のホームページと情報が全然違う」
「国民の皆さまへ」
「できるだけ、速やかに、集団移転の手続きをお済ませください」
「移動の船は問題なく毎日出航いたします」
「ご予約したステーションに時間通りにお越しください」
「乗りすごされた方は、新たに予約を取り直してください」
「1年間かけて、新しい星への集団移転を完了いたします」
「最終の船に乗り遅れないように」
「再三のお願い、さらに、きつく、お願い、申し上げます」
「最終の船に乗り遅れないように」
「1年間かけて、新しい星への集団移転を完了いたします」
「最終の船に乗り遅れないように」
「最後の船に」
「最後の船」
「最後」

じつと、「わたし」は観客を見つめて。

わたし 実家がね、模型屋で、街づくりとかで見たことありませんか。模型。こんなふうに街を作りますって、模型。ミニチュア。長女のわたしは父に似て指先が器用で「お前にしか継げないだろうな」って言われて、どきりと指先震えて、そうか、わたし、継ぐんだ……って、自分が作った模型の街を見下ろした5歳児が、小学校に入ったら隣の席のミオちゃん漫画好きでわたし書いた絵を見てぶるっと「漫画家になって一緒に世界を描こう」って言葉になんだかわたしもぶるっとしてケント紙買い込んで、中学校になったら親友がバンド最高女子で、はい、キーボードって渡されて、え、弾けないって言ったら「弾ける弾けないじゃない、弾くしかないの」その言葉に揺さぶられ独学で鍵盤肘引き殺法を生み出してバンドやろうぜ県大会で優勝。大学生になったらきつとまたバンドをするんだと思っていたら、腕引っ張られて気づいたら演劇サークルの新入生歓迎公演の会場で椅子に座らされて、お客はわたしを入れてたったの3人きり。舞台上には役者さんが15人、えっ!!? 登場人物の方が多いですけど、えっ!!? 衝撃……! 指先が、ズキズキするくらいに、衝撃。お客がたった3人なのに、全力、全開、人間の体ってぶるぶるしてる、人間の声もぶるぶる、こんなふうに震えるんだって、お話の内容なんかなんにも覚えていないけど、誰かがセリフを言うたびにビリビリした皮膚を覚えてる。わたし、きつとその時初めて、人って呼吸して生きているんだって知った。はああああって息吐き出しながら椅子から立ち上がったら、「なんかすごくない?」ってお客その1に話しかけられて、そしたら「うん、すごかったよね、きみ、ナニ学科?」ってお客その2に話しかけられて、「あ、う、うん、すごいですね、哲学科」ってお客その3のわたしが答えたら、お客その1もその2も同時に、「あんたいい声してるね、役者向きじゃない?」それが始まりで、そこからあつという間の15年、ずっと劇団やってこの年になっても楽しくてこんなに長く続くなんて思っていないから、とつとくに娘の将来に希望を見出さなくなった親から、「あんたの船の乗車予約券が届いたから早く予約しんさい」って連絡ももらったけど、

わたし ……乗らん、乗らんよ、わたしはここに残るんよ。

わたし 最後の最後まで、お芝居するんよ。

わたし もし本当に地球が終わりなら、

わたし わたしらの最後のお芝居の観客を、この地球にするって、

わたし 決めたんよ。

わたし わたしらのお芝居を、地球が観て、

わたし そんなで、地球の終わりを、わたしらが見る。

わたし だから乗らん、乗らんよ、お父ちゃん、お母ちゃん……

わたし 「それはお前の考えか？」

わたし 「違うだろうが？ いい年してまだそんなこと言いよる」

わたし 「お前はいつつも、誰かになんか言われてすぐに考え変わる」

わたし 「変わるならまだマシだ、お前は、ハナからなんも考えとらん、これっぱかしもお前にはなんもない。自分でなんにも考えつかん。自分にはなんにもないからすぐ人の尻馬に乗っかって言いなりになりよる」

わたし 「自分がないからすぐに人の言うこと鵜呑みにしやがる」

わたし 「お父さん」「いや、やっと言うてやる、お前は強く引っ張られたらあっちに行ったりこっちに行ったり」「お父さん」「そんなんやったら無理にでも結婚しろって強く言うとかべきやった」「お父さん」「お母さんがもうそんな時代と違ってイマは尊重価値観多様性いうから」「お父さん、お父さん、おとう」「お前はな、今はそんなこと言いよるが、時間が経ったら、どうせまたすぐ誰かのなんかに影響されて考え変わるやろが」

わたし、その時の様子を思い出し、味わって。

わたし お父ちゃん、当たってるけど外れてる……

そして、観客を見据えて話しかける。

わたし 最終便。

じつと、観客を見る。

わたし みなさんも……理由が、あるでしょう？ 最期の最期まで、ここに残っていた皆さんだから、

わたし だけど、今は、見下ろせば青と緑の星……

窓から、地球を見下ろしたのだろう。

わたし こんなこと、ねえ、だって、

わたし 自分が生きている間にこんな、こんなことが起こるなんて、

わたし ねえ、

わたし 自分の考えなんて、人間の想像なんて、いつだって現実のほうが想像を軽く越えて、

わたし だって誰も、あなたも、あなたも……

わたし イマ、起こっていることだって、

わたし 想像できなかったでしょう？

えどうするんだらうわたしだったらどうしたんだらう残る残るな、
えでも子どももいたらやっぱそれきついんじゃないかなわたしがギ
チギチするっていうかいやでもぎやくにぎやくってなんのぎやく
わかんないけど腹座るみたいなニンプだけにいやこれ違うかええ
えどうするどうするんだらうもし子どもがいたらここに残ってい
たかなあ

はつきりとは聞き取れないほどの、自問自答。

ざくざく。

でも隣で聞いているとなかなか、うつとしい。

ざくざく。

ざく。

ニンプ その考え、あたし大嫌いですから。

わたし え？

ざく。

ざく。

ざく。

ニンプ 「もし子どもがいたらここに残っていたかなあ……」って、さっきつ
ぶやいた。

ざく。

ざく。

ざく。

わたし ……心の声が、

ニンプ がつつりこぼれ落ちてましたから。

わたし 理解が、その、追いつかなくて、その、なんていったらいいかすごく、

ニンプ すごく失礼だし、すごく、むかつく。

わたし え……

ぢく。
ぢく。
ぢく。

ニンプ あたし、破滅するために残るんじゃない。

ぢく。
ぢく。
ぢく。

ニンプ 自分と、もうひとつの、この命を運んでるの。

ぢく。
ぢく。
ぢく。

わたし ……運ぶ？ え、は、運ぶ？

ぢく。
ぢく。
ぢく。

ニンプ 月の稲穂まで。

ぢく。
ぢく。
ぢく。

わたし つつ……？

ぢく。
ぢく。
ぢく。

ざく。
ざく。
ざく。
ざく。
ざく。
ざく。

わたし ……………あのそのメジャーだったらすみません、月の稲穂……………つて、
ニンプ 月明かりに光る稲穂。

ニンプ、即答。

「わたし」は困惑。

ざく。
ざく。
ざく。

わたし ……………それは……………何かの呪文？
ニンプ 稲穂がお辞儀してるみたいにとくさん実る場所のこと。
わたし 稲穂が実るつて……………

ざく。
ざく。
ざく。

わたし ……………だってもう、イマは、イマはどこもかしこも不毛の土地で植物な
んか何植えたって育たないつてみんな言つて、
ニンプ みんなつて誰？
わたし ……………誰つて……………

「わたし」は黙るしかない。

ざく。
ざく。
ざく。

ニンプ 夜風に吹かれて揺れて、さざ波みたいに流れて稲穂の海。その真ん中に月のクレーターみたいにくぼんだ大地があつてそこが出産場所だって、すぐそばには水辺。みんなそこで出産前と出産後に水浴びをする。月が、水面に浮かぶ。稲穂が月の明かりで、本当に金色に光る……つて、

ざく。
ざく。
ざく。

わたし みんな、とは……？

ざく。
ざく。
ざく。

ニンプ あたしみたいな、みんな。

ざく。
ざく。
ざく。

ニンプ 新しい星には行かず地球に残る妊婦たちはみんなそこを目指し、集まり、助け合つて安全に、子どもを生む……

わたし それ……どこからの情報？ 中央政府や自治体からじゃ、

ニンプ ないです、だってこれは妊婦だけに届く情報、

わたし は、

ニンプ だからそこには妊婦しかいない。

わたし ……たまひよクラブとかに載つてる？

ざ

ニンプ、なんとも言えない顔になって止まる。
なんとも言えない顔で「わたし」を見るが、

わたし え？

わたし え、え、あの、

ざく。

ニンプ、また歩き出す。

「わたし」は慌てて追いかける。

ざく。

ざく。

ざく。

ざく。

ざく。

ニンプ ……聞こえた。

「わたし」は歩くニンプの横顔を見る。

ニンプ どくんどくん左へ、うん、

ニンプ どくんどくん、それじゃ右へ、そう、

ニンプ どくんどくん進むよ、うん、

ニンプ どくんどくん進んで、そう、

ニンプ 足が向くほうへ歩くとそこへたどり着く。

ニンプ 大丈夫、どくんどくん。

ニンプ 大丈夫、どくんどくん。

ニンプも、「わたし」を見かえす。

わたし ……………え？

ニンプ ええ。

わたし いや…………いやいや、ええ、でなくて、あの……………地図……………は、
ニンプ ありません。

わたし え、え、え、じゃあ、イマ、闇雲に歩いてる……………？

ニンプ 闇雲じゃない、聞こえてるから、

わたし え、

ニンプ 強く聞こえる方向へ、

ニンプ、腹をなでた。

ニンプ だから、妊婦にしか辿りつけない。

「わたし」はニンプの腹をじっと見ていたが、

ざく。

ざく。

ざく、

わたし ……………え……………と、

「わたし」立ち止まった。

驚いて。

というか、

驚きを通り越して、

呆氣にとられたのかもしれない。

手に持っていたニンプのトランクや、

自分の荷物なにもかも、

手から力が抜けてごろんと転がって。

放心。

啞然。

しばらく。

はっと我にかえって、

わたし ……っこんきよ!? 大事な根拠はそれどこに信じられる根拠が、それ
やばい思い込みで、やっぱ破滅でこんきよはつつっ!!?

ニンプも立ち止まり、
うんざり振り返った。

ニンプ あのね。

わたし は、

ニンプ あたしはなんにも頼んでいません。

わたし はい、

ニンプ 一緒に来て欲しいなんて頼んでない。あなたが、勝手に、

わたし あ、はい、そうです、勝手に、

「わたし」は自分の荷物以外に、
ニンプのトランクまで持って歩いてきたのだ。

ニンプ 勝手に盛り上がって勝手に荷物持って勝手についてきて勝手に心配し
て勝手に疑っているだけで、

わたし ですけど、ええ、はい、すみません。

ニンプ そんなに疑うならなんについてくるんですか。明日朝イチでノミの一
人芝居の公演あるんでしょう? 準備いいんですか!?

わたし ノミの一人芝居って言わないでなんかすごい切なくなるから、

ニンプ 知らないし！

わたし 妊婦さんは重たい荷物持ちやいけないってうちのおばあちゃんが、

ニンプ あなたに関係ないの？

わたし えでもだって、ひとりで、歩いて、荷物持って、もしいきなり陣痛始まったらとか、なんか分からないけど出血したらとか、は、破水とかしたらとか、よく知らないけど、ひとりじゃ、絶対に、

ニンプ なんかあったらなんかできるような経験でもあるんですか？

わたし 看護師の役を2度ほど。

ニンプ それ無意味！

わたし だけどひとりは心細すぎる！

ニンプは軽くため息ついた。

そしてゆっくりと向こうを指差す。

ニンプ もう半年も歩いて来た。

わたし え……………

ニンプ 山に囲まれた小さな小さな集落から。ひとりで。

わたし ……はん、とし、

ニンプ 新しい星に行くのかここに残るのか。船に乗るか乗らないか、何を信じるのか信じないのか、どれが嘘か本当かなにが正しいか間違っているのかどうしたら生き延びれるか毎日毎日誰も彼も熱病に浮かされたみたいな大騒ぎで、

わたし ……それは……………うん……………いきなりの集団移転宣言だったから、あのころ、そうホントに……………

ニンプ お義父さんとお義母さんの意見もまとまらないし、旦那も会社の言うことに振り回されるし、あたしの実家からは毎日うるさい電話がかかってくるし、新しい星に移転して本当に安全だって保障は？ じゃあここに残ったら安全だって保障は？ どこまでこの国を信用するのかできるのかって毎日みんな集まって集会所で話し合って、正解が何なのかも分からないから、そもそも正解なんかあるのかもアヤシくって、誰も何にも決めきれずに一ヶ月経って、二ヶ月経って、三ヶ月経って、

一気に喋っていたニンプ、少し、考えた。

ニンプ あたしずっと黙ってた。別にそれほど意見も聞かれないし、ここじゃヨメって今だにそういうものだし、それでいい……って、思ってたから……黙ってた……けど、違う、黙ってたから……？

ニンプは刺した指をゆっくりと下ろす。

ニンプ 黙っていると、よく聞こえる。

わたし ……なにが？

ニンプ 雨の音とか。

ニンプ 月の夜の音とか。

ニンプ 畳の上を小さな蟲が歩く音とか。

ニンプ 遠くで誰かがくしゃみ。

ニンプ 誰かの噂話は聞こえすぎて、

ニンプ じっと見ている窓から入る太陽の光、

ニンプ 横切っていく風、

ニンプ 花が開く前のちよつとだけ弾ける音、

ニンプ 聞こえすぎるから。

ニンプ そのうち騒いでいる人たちの心の奥の音までも、

ニンプ 隣の人の音、お向かいさんの音、お義父さんの音、お義母さんの音、外からの、声、音、漏れて、聞こえて、それから、

ニンプ いろんなところで気を使ってもう疲れ切った旦那の音、

ニンプ それから。

ニンプ、自分の腹を見て。

ニンプ もうひとつ、聞こえてきた。

ニンプ 音。

ニンプ あたし、たぶん妊娠してる……

「わたし」の視線を感じて。

ニンプ おかしなことというニンプだなんて笑ってもらっていいです。

ニンプ あたし、それからじっと自分の内側の音にばかり耳をそばだてて、聞こえてくる音を聞き取って、余計な情報を聞きたくなくて、外からのものを全部全部聞きたくなくて、熱病みたいに騒ぐ人たちの音を聞きたくなくて、ニュースもラジオも町内会の放送もネットもなにもかもおかしなことというニンプだなんて笑ってもらっていいです。

ニンプ お腹が目立つようになる前に、あたし、その夜、そっと旦那の腕枕からすり抜けて、

ニンプは、眠る旦那を見つめたあの夜を思い出すのだ。

ニンプ あなたが好きよ。本当に好き。

ニンプ よかった。

ニンプ あなたでよかった。

ニンプ だからもっと自分のことだけを考えて。

ニンプ 残るって怒鳴るお義父さんと、移動するって泣くお義母さんの間で悩んで疲れてあなたが何もかも解決しようなんて思わないで。みんな出来ないこと抱えるから潰れちゃうの。自分のことだけ考えて。

ニンプ 「あたしも自分のことは自分で考えて選ぶから」

ニンプ、驚いて、

ニンプ いま誰が言ったの……？

自分の唇に触れた。

ニンプ こんなこと、あたしが言うわけない、言えるわけない、こんなこと、考えたこともなかったのに、あたし、これ、

ニンプ、腹に触れた。

ニンプ ずっと黙ってたあたしの音……？

ニンプ し。

ニンプ 黙って。

ニンプ 静かに。

ニンプ 黙って自分の音を、

ニンプ、
目を閉じて、
自分の音を聞いた。

ニンプ どくん、

ニンプ どくん、

ニンプ どくん、

ニンプ どくん……

ニンプ 歩こう……？

ニンプ うん、そっちだね。

ニンプ うん、そう、そうね、

ニンプ うん、これでいい、このまま歩こう。

「わたし」、ゆっくりと膝を床について、
じっとニンプの腹に触れてみる。

ニンプ おかしなことというニンプだなんて笑ってもらっていいです。

ニンプ、跪く「わたし」を見下ろした。

ニンプ あたし、とことん自分だけを信じてみようと思った。

ニンプ 選ぶのは、あたし。間違っても、あたし。誰のせいにもしないし、誰
のことも責めない。あたしが選んであたしが決めてあたしが進む。

ぶるり、と「わたし」

ニンプ、ゆっくりと目を閉じる。

ニンプ あたしを選ぶ。

ニンプ あたしが決める。

ニンプ あたしが、

ニンプ ああ……

ニンプ こんなに、

ニンプ こんなに、

ニンプ、ゆっくりと目を開けた。

ニンプ こんなに爽快な気分……なるんだ……

ニンプ、「わたし」がごろんと落としたトンランクを持って。

ニンプ だからあたし、トンランク持って家を出た。

「わたし」を見る。

ニンプ あたしが言いたいこと、分かりますか？

わたし え……と、

ニンプ ぶっ飛んでるの。

わたし え？

ニンプ 生半可なあたしじゃない。ひとりで心細いなんてそんなのとっくの前にもう経験済みで乗り越えて、あたしは、あたしの内側から聞こえてきた月の稲穂の情報を本気で信じてる。だってもうこの世界で本当に根拠がある情報なんてどこにあるの？

「わたし」はなにも答えられない。

ニンプ システムがもうなにかも、もう、全部、崩壊して、今まで当たり前だって思ってきたことがなんも信用できなくなってただいまこちらの生命保険30年契約したほうがお得って、これなんも意味なかったじゃない！

わたし いきなり生命保険のことをわたしに言われてもっ！

ニンプ 外側に信じられるものがなんにもなくなったら、なにを信じるってことじゃない。だってあなた何を信じて今までここにずっと残っていたの？

「わたし」キョトンとした。

わたし ……なにを、信じて……？

わたし えーと……

「わたし」のキョトン感がすごすぎて、

ニンプは思わず黙ってじっと見る。

わたし えーと……えーと……わたしの場合、えっと……信じた仲間は、もう、

とっくに、先に船に乗っちゃって………

ニンプ ならどうしてあなたは乗ってないの？

わたし え、だって、

「わたし」キョトンと考える。

わたし だって、

わたし わたしらのお芝居を、地球が観て、

わたし そんなで、地球の終わりを、わたしらが見る。

わたし これすごく面白い……って、面白いそれやりたいすごくやりたいって、あ、や、と言っても、そもそも、わたしの、考えじゃないけど、でも、言われてああそれだ……って、みんなで盛り上がって、みんな……

わたし あれ……

「わたし」 ゆっくりと周りを見渡す。

わたし ……そして誰もいなくなった、みたいな、あれ、えーと、あれ、なんだかわたし、イマさら、冷静に考えたら、あれ、わたしだけ、取り残され感じが、あは……あれ、ちよつと笑える、笑えるね……はは……

はは。

面白くもないのに、

「わたし」 笑ってみせる。

ニンプ あたしは、誰のことも笑わない。

ニンプの言葉は力強い。

ニンプ あたしが自分を信じるのと同じように、誰だって自分を信じたいんだから、絶対笑ったりしない。

わたし 自分を信じ、って？ え、それどういう、

ニンプ え、どういう？

わたし はい、どういう意味？

ニンプ え、面白いと思ってここまで残ってるってことだから、あなたが信じ

ているのは、結局、面白いと思った自分じゃないの？

「わたし」、考えてみるが、

わたし ……………え、そうなの？

ニンプ え、あたしに聞かないで。

わたし すいませ、あ、その、わたし、自分、の、考えが、なくて、その、わたし、いつもそうで、

ニンプ はあ？ 意味わかんない。

わたし え、え、どうしてなにが？

ニンプ 自分の考えがない人が、どうしても終わっちゃう地球に残ることを選んでるの？

わたし ……………選んでる？

ニンプ 始まりがどんなだったかなんてあたし何にも知らないけど、そんなのどうでも良くなって、結局はあなたが自分で決めて、自分でそれ選んで、自分でここに残ってる、ってだけのことじゃないの？

わたし 選ぶ……

「わたし」、ぶるりとしたのだ。

わたし 「まともじゃない世界の真ん中で、あたしは真っ当に、真っ向から、自分の考えで、選んでここまで歩いてきて、これからも歩いていきます」

ニンプ それあたしが言っ、

わたし 震えちゃったんだあ……！

ニンプ え？

わたし 震えて、わたし、これきつと、わたしがやんなきゃいけないことだつて、だからなんか出来ることないかって、せめてトランク持って、思わず、

ついてきちゃって、15年も続けたお芝居よりも震えて絶対やんなきゃいけないことだってなんか震えて分らないけど震えたから、お父ちゃんの言った通りかもしれないけど、ああ、もうだけど、わたし、いつもいつも、人生決まる時はいつも誰かの言葉に震えて、でもいつもなんか絶対で、

ニンプ、思わず吹き出した。

わたし え？

ニンプ、ちよっとこれはおかしいと笑ってしまふ。

わたし え、笑った……？

ニンプ あ。

しかしまた笑ってしまふ。

わたし 誰のことも笑わないって、え？

ニンプ ご……めん、なさい、だって……！

やっと、笑いを抑えて。

ニンプ こんにちは、とか、闇雲とか、やばい思い込みとか、あたしのことドン引きしたくせに、そっくりそのまま、あなたも同じだなんて、

わたし え、

ニンプ 震えたかどうかで人生決めるって、なにそれ、結局なんにも根拠ないじゃない。

わたし ………………本当だ。

ニンプ、くすりと。

ニンプ あなた……面白い人ね、

「わたし」も、思わず笑った。

ニンプ あ。

ニンプ、笑ったまま止まる。

わたし え？

ニンプ し。

わたし え。

ニンプ 黙って。

ニンプ 静かに。

ニンプ 黙って自分の音を、

ニンプ、どきりとして、

ニンプ まじい、

自分の足と足の間を見た。

ニンプ 破水した……

「わたし」、観客をじっと見る。

わたし 彼女はこの最終便の船には乗っていません。

「わたし」、船の窓から外を見た。

わたし 見えますか？

わたし もう見えない？

わたし 青と緑の、わたしたちの星。

ふっと、視線を観客に戻して。

わたし ね。

わたし わたしたち、どうして移動しなければならなかったんですっけ？

わたし 本当の本当の原因は、

わたし ウイルス？

わたし 環境破壊？

わたし 温暖化？

わたし 永久凍土がぜんぶ溶けて水の都に？

わたし また大きな地震が？

わたし 地球が大きなクシャミをした？

わたし それともなにかに侵略された？

わたし それぜんぶひっくるめたことが起こった？

わたし ね、どうしてわたしたちは、あの、緑と青色の故郷をあとにしなればならなくなったんですって？

わたし 専門家の言うことはいつも難しくくて、

わたし 指導者たちの言うことはいつも空々しいから、

わたし この世界のことを、誰が本当に知っているんでしょうか。

「わたし」、自分の指を見た。

わたし けどわたしは彼女の指の力を知っています。

「わたし」、ゆっくりと床に膝をついて、両手を伸ばす。

「わたし」の伸ばした指先には、

ニンプの指が絡んでいる。

握りしめている。

わたし この小さな小さな世界の始まりを、始まりの震えを、わたし、見てきました、体験しました、だから、

ニンプは膝を立てて、空を仰ぎみるように寝転んで、

万歳した両手を、「わたし」が反対側から必死に、

握りしめている。

わたし 語ります。

ニンプ。

息んだ。

強く握る。

額に汗。

強く、

ニンプ、世界がねじれるくらいの息みをする。

わたし なんにも知らない。

ニンプ。

息を吸う。

わたし だけどなにもかも知ってる、

再び、世界がねじれるくらいの息みをする。

わたし みたいに、

ニンプ。

息を吸う。

わたし あの子は、彼女は、

再び、世界がねじれるくらいの息みをする。

わたし 吸って、吸って、吐く。

ニンプ、

わたし わたしも、

息を吸う。

わたし なんにも知らない、はずなのに、

再び、世界がねじれるくらいの息みをする。

わたし 知ってる……

わたし きっと知ってるんだ、

わたし どうすればいいか、

わたし だから信じたくなくて、

わたし 月の稲穂、

わたし 本当に、

わたし 本当に妊婦だけが知っているその場所が、

わたし この地球上の、いろんな国に、いろんな場所に、たくさん、たくさんあつたらいいなって、

わたし 信じたくなくてわたし、

わたし 夜風に吹かれて揺れて、さざ波みたいに流れて稲穂の海。その真ん中に月のクレーターみたいにくぼんだ大地があつてそこが出産場所だつて、すぐそばには水辺。みんなそこで出産前と出産後に水浴びをする。月が、水面に浮かぶ。稲穂が月の明かりで、本当に金色に光る、彼女みたいなみんな、みんな、みんな新しい星には行かず地球に残る妊婦たちはみんなそこを目標

し、集まり、助け合って安全に、子どもを、

わたし あ、

「わたし」、空を見た。

思わず、ニンプもつられて空を見た。

そこには、きつと、

宇宙船が飛んでいくのだろう。

わたし 船……

わたし 飛んでいく……

わたし 新しい星……

わたし ここは崩れ消え去りいずれ消滅する……

ニンプ、

ニンプ ねえ……

ニンプ、「わたし」に問いかける。

ニンプ どっちが本当だと思う？

わたし ……え？

ニンプ 本当に地球は終わっちゃう？

ニンプ 地球以外に住める星なんて本当にある？

ニンプ みんながぶるぶる震えてびびったこと、ねえどっちが本当だと思う？

わたし　　こんな、こんな時にそんなのどうでも、

ニンプ　　こんな時だからあたし思うわけ、

わたし　　は？

ニンプ　　どっちかなんて、

ニンプ　　どっちが本当とか、

ニンプ　　どっちが正しいとか、

ニンプ　　どっちが、助かる、とか、

ニンプ　　どっちが、

ニンプ　　なんて、みみっちくってケチくさいあたしはどっちも、

わたし　　どっちも？

ニンプ　　どっちも信じない……………！

ニンプ　　どっちも、どっちも、どっちも、どっち選んだって本当、どっち選んだって正しい、どっち選んだって、生きのびる……………だからあなた、乗りなさいよ。

わたし　　……………え？

ニンプ　　あたしはここに残るんだから、あなたは船に乗って、確かめてきて。

わたし　　……………なにを……………？

ニンプ あたしがイマ感じてるのが、本当かどうか、

ニンプ それでいつか、

ニンプ いつか、

ニンプ いつかどこかで、も一回会ってどうだったか答え合わせでもしない？

ニンプ いつか……おばあちゃんくらいになった時とか、

ニンプ いや、

わたし いや？

ニンプ 例えはもうふたりとも死んじゃったあとでも、

ニンプ あたしはこの子に伝えるから、

ニンプ あなたも、

ニンプ 子どもでも、後継者でもなんでもいいから、伝えて、

ニンプ なん十年後かの答え合わせとか、

ニンプ 思ってるだけでちょっと面白い。

ニンプ あ、

わたし え、

ニンプ あのノミの一人芝居だけは伝えないで、

わたし ええ？

ニンプ あれ本当に死ぬほどつまらないから、
わたし イマそれ言う？

「わたし」とニンプ、
思わず笑った。

ニンプ あたし、

ニンプ なにもかもそんなに簡単に消滅しないって思う、

ニンプ だって、

ニンプ しぶといから、

ニンプ 強いから、

ニンプ あたしの故郷の山、

ニンプ どこまでも緑、どこまでも、どこまでも、

ニンプ 見える……

ニンプ あたしの家の裏山の緑、

ニンプ 見える。

ニンプ 大きいの。

ニンプ なにもかもが大きくて、

ニンプ だから大丈夫、きっと、

ニンプ あ。

ニンプ 稲穂……………？

ニンプ、何かを見つけた。

「わたし」もニンプの視線の先を見る。

そしてはつきりと認識するのだ。

わたし ……稲穂、

わたし たくさんの稲穂、まるでお辞儀をするみたいな……

わたし それから……

「わたし」はニンプをじっと見つめる。

ニンプはゆつくりと立ち上がり、

わたし 彼女みたいなみんな……みんな……みんな……新しい星には行かず地球に残る妊婦たちはみんなそこを目指し、集まり、助け合って、

くるりとお包みに包まれた赤ん坊を抱いて、

たくさんの彼女みたいなみんなとともに、

歩いていく。

歩いていく。

歩いていく。

「わたし」だけになった。
ひとり。

観客たちをじっと見ている「わたし」

わたし おとぎ話のように、

わたし 添い寝の昔話のように、

わたし 話してあげてください。

わたし ここから見えるあの青と緑の星には、

わたし わたしたちの、

わたし 遠い遠い遠い兄弟のような存在が、

わたし いるかもしれない。

懐かしそうに「わたし」は故郷、地球を見る。

が、

じっと観客を見つめて、

ふっとなにもかも、

やめる。

「わたし」をやめる。

大原 ええ、作り話しです。

大原 お話です。

大原 物語です。

大原 なんで物語なんているんでしょうね。

大原 なんで演劇なんているんでしょうか。

大原、じっと、自分の指先を見た。

あの子の、彼女の指の強さを思い出す。

もう「わたし」ではないのに、

演じたあの感覚は残っている。

じっと指を見つめる大原。

大原は気づかないだろう。

あの子が、彼女が、

ゆっくりと大原の隣に座る。

赤子を抱いて。

そしてじっと見つめている。

大原はもう「わたし」ではないので、

それには気づかない。

が、

大原 作り物なのに本当でね、

大原 演技でしようって言われればまあそうなんですけど、

大原 あの指の力は本当で、

大原 嘘じゃなくって、

大原 だから、

大原 震えを、

大原 震えをね、観に来るんじゃないかって……

大原 あなたもイマ見ているこの震え、これ。イマのこれ。そのもの。生きて
いることのそれ。

大原 自分のことなんてよく分からないから、

大原 生きているってなんなのか忘れてしまうから、

大原 肉体のふるえ。

大原 細胞のふるえ。

大原 存在のふるえ。

大原 ふるえているのは、わたし……

大原 ……あなた？

大原 震えている誰かを観て、

大原 震えている自分を思い出す、

大原 それがわたしたちの、演劇なんだと思う。

おしまい